

山峡の風

牧野信一

青空文庫

一

百足^{むかで}風と称する奇怪なたちの風は、殆ど人に知られてゐないらしい。竜風といふのは去年も日比谷で挙げられたが、それよりも稍かたちが小さく、凡そ構造は似てゐるが、それよりもはつきりと日本趣味のもので滑稽味に富んでゐた。風車仕掛の金色の眼玉と赤く長い舌と馬の尻尾の鬚を持ち、団扇型の胴片が左右に棕櫚の毛を爪と擬した節足を四十余片つなぎ合せて、空に浮游するとまことに節足類のうごめくさまを髣髴させた。金紙の眼玉が爛々と陽に輝き、赤く長い舌がぺらぺらと微風に翻つた。

いつか、風に関する何かの文献を読んだ時、この風は昔湘南地方の一部で挙げられ、現今では殆ど姿を没して居るとあり、尚その製作者は相州小田原町に唯一人生存してゐるさうだが名は解つて居らぬとあつた。わたしも、その唯一人といふ製作者の名は知らぬが、その地方では今でも極めて稀に冬の青空に見出すことがあり、わたしも現在その一体を所^も有してゐる。小田原の町から五六里北へ踏み込み、足柄山の麓にある矢倉沢村といふところの乙鳥音吉なる老人が、わたしの幼少の頃にもこれを作つてわたしに贈つたが、近年――

―と云つてももう六七年も前のことだが、急にわたしはそれを欲しくなつて、矢倉沢村を訪れたのである。乙鳥音吉はわたしの幼少の時にもチョンまげをつけた相当の爺いさんに見えたが、いつか訪れた時もやはり同じやうな感じの頬のこけた鷺鼻の顎の長い爺いさんで、禿頭の後頭部に川蜻蛉のやうに小つぽけなチョンまげを結んでゐた。たゞ昔と明らかに変わるところは、完全な聾者になつてゐたことである。わたしは、その時も一ト月あまりも彼の屋敷に滞在して製作の助手をつとめ、その後も何故か冬になると、聾者の爺いさんと酒を酌む静けさが慕はれて、遙々と馬に乗つて訪れた。わたしはその家の一室に机を構えてゐた。

静かな小春日がつゞいてゐた。音吉が百足の頭部を、そしてわたしが尾端を恭しくさへ、霜柱を踏みながら、収穫^{とりの}れの済んでゐる芋畑の丘に登つた。わたしは丘の頂上に風をさへて立ち、音吉は坂のふちで糸をとつて、風を待つのであつた。どんな風を待つのか、一向わたしにはそれらしいものも感ぜられないうちに、稍暫く天を仰いで呼吸^{いき}を見はからつてゐる音吉は、間もなくカケスのやうな叫びをあげて合図の腕を振つた。全く、わたしには風などは解らぬまゝながら、それと同時に、わたしは六尺ちかくも風と一処に飛びあがつて手を離すのであつた。と音吉は、一步でもその場を動くことなしに、素早く五六回も

糸を腕一杯にたぐつたかを見ると、ムカデはもう松の木の上に胴体をうねらせ徐ろに丘の向方に落ちかゝるのであつた。あはやその尾端が地に接しようとする、音吉はまた大きく腕一杯に糸をたぐり、再び風が松の木の上に泳ぎ出すと、徐ろに糸を伸ばした。ほんの三四回それを繰返すうちに最早ムカデは完全に天空高く浮き出し、伸ばせば伸ばす程悠々と高く、海拔三千尺の矢倉岳の頂きよりも遙かに見える空に登つて、この眺めは一目万両とでも唸つてゐるかのやうであつた。風糸は三升箆に一杯とぐろを巻き渡を引いた強靱の長さで、箆が空になるころには風はもう実物のムカデのやうに小さく見えたが、それでも眼玉の光りや舌の面白さや鬚の立派さや、そして節足の一本一本までが絵彩えどつた如く物々しく仰がれた。

二

ムカデ風の上げ方は、余程の練達を要すると見え、従つて其処に興味も深い仕儀ではある。わたしは特に風上げの技巧が不器用とも思はれなかつたが、ムカデ風を上げるには何時も余程の苦心を余儀なくされた。音吉の手にかゝるとあんなに他易く上り付いたが、わ

たしが此度は音吉に代つて糸をとり、合図を待つて、音吉のやうにその場で糸をたぐらうとする態の巧者を真似ようとしても、風は地を舐めて引きずられるばかりで、いつかな空へなどのしたこともなく、忽ち此方の両腕ばかりが櫂のやうにしびれるだけだった。寄んどころなくわたしは跣足になつてものゝ一丁あまりもあらうといふ急坂を芋畑の上から下まで糸を引いたまゝ一散に駈け降りるのであつた。それで辛うじて松の木の上ぐらゐまで上つたかとおもふのも束の間で、息切れを休めるうちには、とうにもう風は地に落ちかゝつてゐた。音吉は、墜落の為にそれが破損することを何よりも恐れ、両腕の上に落ちて来る風をうけようとして、上を仰ぎながら踊るやうな恰好で待ちうけた。風は彼の近くに達すると、恰で甘えかゝるやうにうねりながら、ぐつたりとその腕の中に身を任せた。

音吉のコーチがあつてさへ、そんな態だつたから、もとよりわたしはあきらめて、上げるといふよりも、如何にもその組立がおもしろく、彩色の具合も華麗なので、壁か天井に飾つて置きたいのだ——などと負惜しみを云つた。伸すと八畳間の天井を隅から隅へ斜めに掛けても尾端は鴨居の下迄垂れさがつた。二条に岐れた長い銀色の尻尾であつた。そして例の舌と鬚をもつた怖ろしげな頭かしらが、恰度音吉とわたしが向き合つて酒などを酌み交す囲炉裡の真上に赤い口腔くちをあけてゐた。わたしは余念もなさゝうに折々それを見あげて飾

りものを悦んでゐる風を装つてゐたが、やはり内心では、これが若し自分の手で他易くも思ひに任せて難なく上げられたならば何んなに愉快であらうか！ と、音吉の力量を羨望する念が強かつた。

「やはり、これも練習かね？」

とわたしは、音吉の聾の耳に口を寄せたり、その意味を手真似で示しながら訊ねた。

「お前さんは不器用の上に、気忙し過ぎるから、容易な辛棒ではなからう。」

音吉は一向わたしに望みを持たぬ氣であつた。

「ともかく——」

とわたしは、然し望みを棄てたがらなかつた。「いくら不器用でも氣永に落着きさへすれば、上げられるようにはなるだらう？」

音吉は、

「いつのことやら……」

と苦笑するだけだつた。

彼は去年の春、老衰病で歿くなつた。八十八歳で、一生涯藥を服んだ験がなく、その時も医者の手にもかゝらなかつたさうである。彼の道具箱から、わたしはムカデ風の図取り

を見つけ出した。絵は仲々器用で、絵具の配合なども大胆に見えたが、文字は自分の名前も書けなかつたくらゐであつたから、何の図取りにも説明が^どついてゐないのである。尤もわたしは屢々彼の助手をつとめたことがあるので大体の想像はつくが、到底風を切つて雲に泳ぐほどの風を作る自信は毛頭も持てぬのである。小田原には、唯一人といふのではなく、未だ三人の人が残つてゐるさうである。直接にわたしは彼等を知らぬので、乙鳥音吉に比べて孰れが名手かも不明である。

三

またわたしは風の風が吹きそめる頃から矢倉沢の、天井にムカデ風が掛つてゐる炉端に赴いた。試みに、たつた一度それを持ち出して裏山へ登つたが、手伝ひの子供連さへが愛想を尽して嗤ふばかりで、埒もなかつた。わたしは、さういふ才分に欠けてゐるとあきらめかゝつた。加けに疳癰を起して荒々しく地面を引きずつたので、あちこちと破損の個所が大きく、どうやら小田原へ運んで残存者の手でも病^{わづら}はさぬ限りは手の配しやうもない無残な風と化してしまつた。

わたしは、主にひとりで炉端の酒を酌みながら、天井の破れ風を見あげた。わたしと乙鳥音吉とはどんなに夜更まで炉端に坐禅を組んだ後でも、朝ともなつて麗かな陽が紫色の山々を染め出してゐる日和を見定めると、とるものもとりあへず大ムカデを担いで裏山へ登つたものだ。憶ひ出の中では飴色の光りが輝き、青空にくつきりとそびえた山々の青肌
に翼を拡げた鶴のやうなかたちの雪の痕が点々と望まれる和やかな冬の日ばかりが続いて
ゐるが、案外にもこのあたりの朝は、早朝から達磨型の矢倉岳を吹き降す烈風が麓の部落
に渦を巻く日が多く、滅多に絶好の風上げ日和などは見出せなかつた。それ故音吉もわた
しも稀に左ういふ朝に出遇ふと胸を躍らせて自慢の風を担ぎ出したわけなのである。頭をかしら
さゝげた音吉が先に立ち、わたしは尻尾と風系の箆を抱へて、物をも云はず坂を登つた。
音吉の腰には、酒を詰めた瓢箪が脚どりに伴れて揺れてゐた。矢倉岳の天辺よりも高く望
める天空にムカデが静かに遊ぶのを眺めながら、風系の末端を杉の幹にしばつたまゝ、音
吉は瓢箪をかたむけた。わたしは枯枝を焚き、その傍らで折々居眠りをしたが、何時眼を
醒して見ても、音吉は放心的な眼を挙げて遥かの風を視詰めてゐた。会話の為には最も誇
張的な身振り手振りをしなければ意味の通じ難い相手であつたから、わたしは終日はなし
かけぬ時の方が多かつた。

この頃わたしは炉端にひとり坐つて、天井の風を眺めてみると、何うせ物言はぬ音吉の気合ひを感じるやうである。破目を洩る風が冷く焚火の上をかすめた。わたしは丘の上の風日和を夢見つゞけるばかりであつた。——時々晴れた朝に出遇ふと、わたしは裏山へ杖を曳いた。霜柱が深く遠方の山には雪の斑点を見た。上げ手の姿は見えないがウナリを取りつけたダルマ風があがつてゐた。トンビ風が二ツ三ツお辞儀をしながら川向ふの土堤^{どて}に添つて舞ひ散つてゐた。見渡す限り電信柱も見えぬ高原地帯のために、風上げは昔ながらの古風な方法で、角風とデルマ風は糸の中途に、ガンギリと杯ばれる刃物を付けて凄烈な切り合ひを演じた。低空のトンビや蟬風や奴風が、応援隊の如くに二体の勇者をとりまいてゐた。勿論、未だ方々の風の出揃ふ時でもなく、子供の遊びに違ひなかつたが、それにしては刻々に風の数が増してゐたものゝ、決してムカデ風の現れることはなかつた。たしか、わたしの部屋のだけがたつた一つの風ではなかつた筈だが、その日その日を期待しても何処の一隅からもあの物凄い目玉の風は^{およ}遊ぎ出さなかつた。若しかするとこの村中である風のツリを掛け得る人物は乙鳥音吉独りだつたのか、それとも他の連中は悉くわたし同様に不器用の上に気忙しい不適任者で、徒らに空を眺めて嘆を久しうしてゐるのか、左ういふ連中と一夜囲炉裡を囲んで座談会を催し度いものだ——とわたしは呟いた。

青空文庫情報

底本：「牧野信一全集第六巻」筑摩書房

2003（平成15）年5月10日初版第1刷

底本の親本：「都新聞 第一七二八六号〜第一七二八八号」都新聞社

1935（昭和10）年12月26日〜28日

初出：「都新聞 第一七二八六号〜第一七二八八号」都新聞社

1935（昭和10）年12月26日〜28日

入力：宮元淳一

校正：門田裕志

2011年9月30日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

山峡の罅

牧野信一

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>